

第98回

## 休日の午後のコンサート

2023.9.3(日) 14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール  
Sun. Sep. 3, 2023, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

## 〈コバケンのベートーヴェン!〉 〈Kobaken's Beethoven!〉

指揮とお話 小林研一郎 Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

ピアノ 中川優芽花\* Yumeka Nakagawa, piano ※当初の発表から変更となっております。

司会 朝岡 聡 Satoshi Asaoka, MC

コンサートマスター 三浦章宏 Akihiro Miura, concertmaster

ベートーヴェン：劇音楽『エグモント』序曲 (約10分)

Beethoven: Overture to "Egmont" (ca. 10 min)

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番『皇帝』\* (約38分)

Beethoven: Piano concerto No. 5 "Emperor" (ca. 38 min) ※当初の発表から変更となっております。

— 休憩 intermission —

ベートーヴェン：交響曲第6番『田園』より第1楽章 (約12分)

Beethoven: 1st movement from Symphony No. 6 "Pastorale" (ca. 12 min)

ベートーヴェン：交響曲第7番より第2楽章 (約8分)

Beethoven: 2nd movement from Symphony No. 7 (ca. 8 min)

ベートーヴェン：交響曲第3番『英雄』より第4楽章 (約12分)

Beethoven: 4th movement from Symphony No. 3 "Eroica" (ca. 12 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために / Dear audience

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪ All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪ Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪ Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪ Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

## 出演者プロフィール

### 指揮とお話 小林研一郎

Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

東京藝術大学作曲科、及び指揮科の両科を卒業。1974年第1回ブタベスト国際指揮者コンクール第1位、及び特別賞を受賞。2002年プラハの春音楽祭では東洋人初のオープニング『わが祖国』を指揮して万雷の拍手を浴びた。これまでにハンガリー国立フィル、チェコ・フィル、アーネム・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、フランス国立放送フィル、ローマ・サンタ・チェチーリア国立管、ロンドン・フィル、ハンガリー放送響、N響、読響、日本フィル、都響等の名立たるオーケストラと共演を重ね、数多くのポジションを歴任。ハンガリー政府よりハンガリー国大十字功労勲章(同国で最高位)等、国内では旭日中綬章、文化庁長官表彰、恩賜賞・日本芸術院賞等を受賞。2005年、社会貢献を目的としたオーケストラ「コバケンとその仲間たちオーケストラ」を設立、以来全国にて活動を続けている。現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィル・名古屋フィル・群響桂冠指揮者、読売日響特別客演指揮者、九響名誉客演指揮者、東京藝術大学・東京音楽大学・リスト音楽院名誉教授、ローム ミュージック ファンデーション評議員等を務める。

公式ホームページ：<http://www.it-japan.co.jp/kobaken/>



©山本倫子

### ピアノ 中川優芽花

Yumeka Nakagawa, piano

現在21歳、ドイツに生まれ育った日本人ピアニスト。2021年、スイスで開催された権威あるクララ・ハスキル国際ピアノ・コンクールで優勝及び聴衆賞ほか併せて獲得。2014年にドイツ連邦青少年音楽コンクールで満点を獲得して優勝。同年ワイマールの若いピアニストの為のフランツ・リスト国際コンクールで第2位を獲得。近年ではロベルト・シューマン国際コンクール(2019)およびイエネ・タカーチ国際コンクールにも優勝。クリスティアン・ツァハリアス指揮によるベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番などオーケストラとの共演の機会も増え、ヴェルビエ音楽祭にアカデミー生として出演。現在フランツ・リスト音楽大学でグリゴリー・グルズマン教授のもと研鑽を積んでおり、公益財団法人ロームミュージックファンデーションから支援を受けている。



©Susanne Diesner

### 司会 朝岡 聡

Satoshi Asaoka, MC

慶應義塾大学卒業後、テレビ朝日のアナウンサーとして活躍。フリーとなってからは、テレビ・ラジオ・CM出演の他、クラシックやオペラ・コンサートの司会や企画構成など、コンサート・ソムリエとしてフィールドを広げ、芸術ファンのすそ野を広げる司会者として注目と信頼を集めている。著書に『いくぞ! オペラな街』(小学館)、『恋とはどんなものかしら 歌劇(オペラ)的恋愛のカタチ』(東京新聞出版局)など。日本ロッシーニ協会副会長。東京藝術大学客員教授。



## プログラム・ノート

解説=柴田克彦

## ベートーヴェンの多彩な音楽を堪能

今回の「休日の午後のコンサート」のテーマは〈コバケンのベートーヴェン!〉。“炎のマエストロ”小林研一郎が、ご存知ウィーン古典派の巨匠**ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン**(1770-1827)の名作を披露します。

前半は、『エグモント』『皇帝』と、序曲及び協奏曲の代表作が並んでいます。ここは劇的な“ベートーヴェンらしい”音楽を堪能しましょう。後半は、交響曲の有名な楽章をピックアップ。こちらは、のどかな『田園』の第1楽章、美しく哀愁を帯びた第7番の第2楽章、当時の交響曲には珍しい変奏曲の『英雄』の第4楽章と、ベートーヴェンの様々な側面を端的に知ることができます。

2007年から21年までほぼ毎年大晦日に全9曲の交響曲を指揮し、東京フィルでも再三演奏するなど、コバケンにとってベートーヴェンは永遠の大重要レパートリー。情熱や活力に余情や滋味を加えた、ベテラン・マエストロの円熟の表現にも注目したいところです。



マエストロ“コバケン”の十八番ベートーヴェンの世界を円熟の指揮と語りでお楽しみください

## 悲劇の英雄を描いた劇音楽が凝縮した序曲

幕開けは劇音楽『エグモント』序曲。1810年、ドイツの文豪ゲーテ作の同名戯曲のために書かれた序曲です。エグモントは16世紀に実在したオランダ独立運動の指導者。ゲーテは、スペインの圧政に対抗したこの悲劇の英雄の史実に、恋人クレールヒェンなどの脚色をまじえて、物語を創作しました。当戯曲のウィーン初演にあたり、宮廷劇場からの依頼で書かれたのが劇音楽『エグモント』。ゲーテを敬愛するベートーヴェンは意欲的に取り組み、序曲と9曲の音楽を完成しました。現在それらが全曲演奏される機会は少ないのですが、傑作の誉れ高い序曲は単独で頻繁に演奏されています。

曲は、荘重な序奏で開始。アレグロの主部に移ると、不安と穏やかな感情が交錯します。そして英雄を讃えた輝かしいコーダ(結尾部)へ。ベートーヴェンらしく暗から明へ至るこの序曲には、劇全体のテイストがコンパクトに凝縮されています。

## ピアノと管弦楽の絶妙な対話が織りなす協奏曲

前半のメインはピアノ協奏曲第5番『皇帝』。1809年にベートーヴェンが完成した最後の協奏曲であり、耳の病を乗り越えて幾多の名作を生み出した、“傑作の森”と呼ばれる創作中期の代表作のひとつです。『皇帝』のタイトル



ベートーヴェンの肖像(1803年、クリスチャン・ホルネマン作)

は、ベートーヴェン自身の命名ではなく、後に出版者が名付けた愛称ですが、曲にまさしくフィットしています。

本作は、当時の協奏曲としては異例なほどシンフォニックな響きをもった大曲。第1楽章冒頭から華麗なピアノ・ソロが登場する点が大きな特徴で、これが曲の印象を決定付けます。協奏曲では通例だった長い名人芸的なカデンツァ(ソリストが自由なソロを披露する部分)などもはや不要とばかりに、自

ら短いカデンツァを記した点も特筆され、そこには首尾一貫した音楽にしようというベートーヴェンの意図がうかがえます。全体に、ピアノと管弦楽が交響曲的な融合と絶妙な対話を成していく、壮麗でエネルギッシュな音楽です。

**第1楽章：アレグロ。**ピアノが広々としたソロを奏でる開始の後、行進曲調の第1主題と歯切れの良い第2主題を軸に、華やかな楽想が展開されます。全曲の約半分を占める長大な楽章。

**第2楽章：アダージョ・ウン・ポーコ・モツォ。**穏やかな主題が変奏をまじえながら流れていく、柔和で幻想的な緩徐楽章。切れ目なく第3楽章へ。

**第3楽章：ロンド、アレグロ。**冒頭の勢いある主題を軸にした勇壮なフィナーレ。ピアノの名人芸も発揮されます。

## 自然に身を置いた人間の佳き“感情”

後半最初は**交響曲第6番『田園』より第1楽章**。1808年に第5番『運命』と相前後して完成されたこの曲も、中期“傑作の森”の一角を占めています。ウィーン郊外の(当時の)田舎ハイリゲンシュタットで主に作曲されており、音楽全体にベートーヴェンが好んだ当地の風物が反映されているとみられています。なお『田園』は、『運命』や『皇帝』とは違って本人の命名です。本作には、



ベートーヴェンが住んだハイリゲンシュタットの家の近くにある聖ヤコブ教会 ©stock.adobe.com

全5楽章の構成、第3～5楽章が続けて演奏される点などの新機軸が盛り込まれていますが、やはり最大の特徴は、内容を示す言葉が各楽章に記され、それに即した音楽が展開される「標題交響曲」の元祖的存在であること。これは来るロマン派の音楽に大きな影響を与えました。ただし、ベートーヴェン自身は「描写というよりもむしろ感情の表現である」と語っています。

それをよく表したのが、「田舎に到着したときの愉快的感情の目ざめ」と記された**第1楽章(アレグロ・マ・ノン・トロppo)**。まさしく自然に身を置いた人間の佳き“感情”を表現した牧歌的な音楽で、冒頭に奏される民謡風の主題を中心に進行します。

## 「不滅のアレグレット」とも呼ばれる名楽章

おつぎは**交響曲第7番より第2楽章**。第7番は、中期後半に第8番と相前後して生み出された人気交響曲です。1812年にほぼ完成。1813年12月の初演で大成功を収め、楽聖の生前における最大のヒット交響曲となりました。9曲の交響曲1曲ごとに新たな試みを行ったベートーヴェンがここで打ち出したのは、リズムの徹底的な強調。これをワーグナーは“舞踏の神化”と形容しました。本作では、各楽章に一定のリズム・パターンが設けられ、それを終始強調することで推進力と生命力が生み出されます。

**第2楽章(アレグレット)**は、「タータタ・ターター」の動きが基本的なリズム・



ベートーヴェンの肖像(1815年、ジョセフ・ウィリアム・ブロード・メラー作)

パターン。この曲はアダージョやアンダンテといった純粹な緩徐楽章が置かれていない点も特徴ですが、同楽章はそれに近い意味合いを持った部分です。曲は、前記リズムが全編にわたって奏される、短調の哀愁を帯びた音楽。ただし中間部は長調の明るめの楽想に変わります。「不滅のアレグレット」とも呼ばれる名楽章で、初演時にはアンコール演奏されました。

## 交響曲の終楽章では珍しい変奏曲

締めくくりは**交響曲第3番『英雄』より第4楽章**。中期の入り口にあたる1804年に完成された『英雄』は、従来にない巨大さで交響曲の歴史を変えた作品です。この曲は、「貧困層から出て王制に戦いを挑んだナポレオンへの共感から作曲されたが、彼が皇帝に即位したのを聞いたベートーヴェンは激高。



交響曲第3番『英雄』のスコアの表紙

『あの男も権力を得ただけの俗物だった』と叫んで、スコアに記した献辞を激しく掻き消し、新たに『ある英雄の思い出に捧げる』と書いた」との逸話で有名です。ただし、どこまでナポレオンを意識して書かれたのかは不明。自らイタリア語で英雄を意味する「エロイカ」と記しているだけに、“英雄的”な要素が含まれているのは確実ですが、もっと象徴的にとらえる見方もなされています。いずれにせよ、ベートーヴェンの新境地へ挑む強い意志を反映した意欲作で、各楽章にも画期的な要素が盛り込まれています。

**第4楽章(フィナーレ、アレグロ・モルト)**は、自由な変奏曲。交響曲の終楽章での変奏曲の採用は珍しく、雪崩を思わせる斬新な出だしも印象的です。続く主題はバレエ音楽『プロメテウスの創造物』から採られたもの。最初に低音の伴奏部分、次いで主旋律が変奏されるという凝った作りがなされています。そして動的な音楽が展開され、一旦穏やかになった後、堂々と結ばれます。

しばた・かつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、Web、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)、「吹奏楽編曲されているクラシック名曲集」(音楽之友社)。